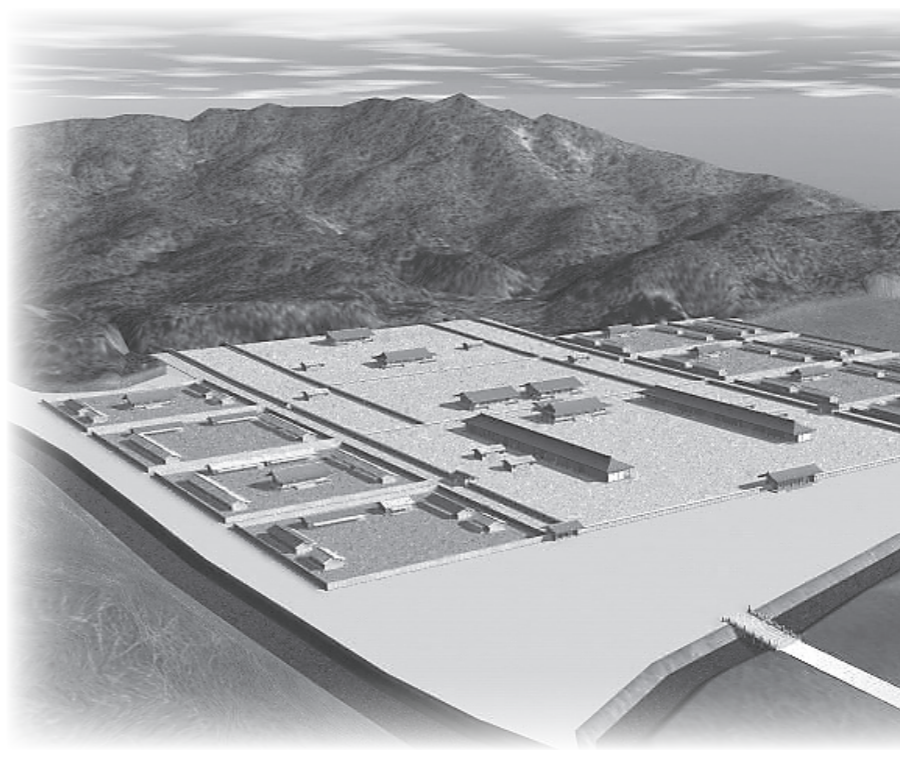


古典文学の夢、甲賀の地に広がる

「万葉集」の木簡、全国ではじめて出土
宮町遺跡



平成9年に史跡紫香楽宮跡（宮町遺跡）調査で出土していた木簡※1点が、和歌の書かれた「歌木簡」であることがその後の調査で判明しました。この木簡に書かれた和歌は、その内容から、古典文学を代表する「万葉集」※2と「古今和歌集」※3と深い関係があり、さらにそれが宮町遺跡から出土したことにより、これらの時代背景も明らかになりました。

今回の発見は、万葉集や古今和歌集をはじめとする古典文学を研究する上で極めて重要な発見で、従来の文学史をも変えるものとなりました。

今月号では、この歴史的発見の内容を「紹介」します。

木簡の表裏に和歌が

平成19年12月、紫香楽宮跡調査委員会副委員長の大阪市立大学大学院教授 栄原永遠男さんが歌木簡の研究のため、宮町遺跡から出土した木簡を再調査していました。宮町遺跡では多くの木簡とその削屑が出土していますが、その中で、当初「難波津の歌」という和歌が書かれた削屑と混ざっていた薄い木片の裏面に「阿佐可夜……」の文字が書かれていたことが判りました。

その後、古典文学や古代史の専門家により多くの調査を重ねた結果、これらの文字は、木簡の表裏に「難波津の歌」と「安積山の歌」の2つの和歌が書かれたものであることが判明したのです。

宮町遺跡が導いた木簡の時期

木簡が出土した西大溝とよばれる大きな水路は、紫香楽宮の中心区画の約200m西側を流れる幹線排水路と推定されています。

歌木簡が伝える新史実

「安積山の歌」は、「万葉集」に収録されていますが、木簡等で「万葉集」と同じ歌が出土したのは全国で初めてです。また、「万葉集」は、通説では、天平17年以降の数年間に編纂されたとされていることから、この木簡は「万葉集」ができた時代よりも早い可能性が高くなります。

このことは、「安積山の歌」が「万葉集」によって一般に広く知れ渡ったのではなく、「万葉集」が編纂される以前に、この和歌が当時の人々に知られていたことがうかがえます。この木簡も万葉集を見ている人が書いていることになりす。

纂過程を知る重要な手がかりとなるだけでなく、歌木簡が新しい史実を伝えたこととなります。

「古今和歌集」の事実が150年前から存在

延喜5年（西暦905年）、紀貫之が編纂した古今和歌集では、仮名序と呼ばれる序文で和歌を学ぶための理論を記し、その後の古典文学にも大きな影響を与えたとされています。

仮名序には、「安積山の歌」と「難波津の歌」の2つの歌は、和歌の父母であり、初めて和歌を習得するために必ず学ぶものである」との記載があります。このことから、こ

の2つの歌のセット関係は、紀貫之が独自に考えた理論と考えられていましたが、今回の出土でこの関係は紀貫之が思いついたものではなく「古今和歌集」の成立より150年以上前に存在していたことが明らかになりました。

- ※1木簡：墨で文字が書かれた木片、紙が普及する以前に文書、荷札等に使用された。
- ※2万葉集：奈良時代の歌集、現存する日本最古の歌集で、ひらがな、カタカナの基となる万葉仮名が使用されている。
- ※3古今和歌集：平安時代につくられた歌集、天皇の命によってつくられた初めての歌集（勅撰和歌集）

歴史の新事実が甲賀で

今回の発見は、考古学だけ

儀式や宴会で使用か

大阪市立大学大学院文学研究科 栄原永遠男 教授



聖武天皇の都、紫香楽宮跡（宮町遺跡）で出土した「難波津の歌」の木簡の裏に「安積山の歌」が書かれていました。紀貫之は「古今和歌集」の序文でこの2首を歌の父母としています。そのセット関係が、一挙に約150年も前の紫香楽宮で確認されたのです。

「安積山の歌」は万葉集にありますが、万葉集と同じ歌が木簡等で出土したのは、これが全国で初めてです。この木簡は約2尺（約60センチメートル）と推定され、歌を書いた長い木簡を持った官人たちが、儀式や宴会で歌い上げたのでしょうか。

でなく、古典文学を研究する上で極めて重要な歴史的発見です。甲賀市は文化財の宝庫です。さらなる歴史が隠されている

かもしれません。先人たちが残した資料から、この地でのような暮らしをしていたのか、ロマンを膨らませるのも楽しみです。

甲賀郡中惣遺跡群が国指定史跡に



▲寺前城遺跡

甲南町新治地域にある寺前城、村雨城、新宮城、新宮支城、竹中城の5つの遺跡が、甲賀郡中惣遺跡群として国指定史跡となりました。

この遺跡群は、戦国時代、甲賀の小領主の自治組織「甲賀郡中惣」に関連した城館遺跡群で、甲賀武士の性格や自治組織のあり方を示す大変貴重な遺跡です。

今後は、この地域の中世史を解明する上で欠くことのできない資料として、地域や学習の場に役立てます。この遺跡については、本紙7月1日号で詳しくご紹介いたします。

なにはつにさくやこのはなふゆごもりいまははるべと さくやこのはな

奈迹波茶佐久夜已能波奈布由已母理伊和波一依倍等佐久夜已乃波奈

あさかやまかげさへみゆるやまのみのあさきこころをはがおもわなくに

阿佐可夜加奈佐佐由流夜真乃母能安佐佐已乃波和可夜母波奈のふ

■出土木簡から推定した木簡の復元図

（ ） 今回出土した部分